

インド密教におけるバリ儀礼

森 雅 秀

1. はじめに

バリ (bali) 儀礼とは食物を中心とした供物を、神々、精霊、鬼神、生類などに与える儀礼である。

インド世界において、神像や神格などに対して何らかの供物を供える儀礼としてもっともよく知られているのは、プージャーであろう。花、香、灯明、食物などを捧げるプージャーの起源は古く、現在でもなお、ヒンドゥー教の寺院を中心に盛んに行われている。プージャーは時代や地域、所属する宗教などによって、さまざまな方法で行われるが、たとえば、ヒンドゥー教の場合、全体が16のプロセスからなる「16階梯からなるプージャー」(śoḍaśa-upacārapūjā) とよばれる儀礼に整備される¹⁾。プージャーもバリも、いずれも「供物の奉献」すなわち献供という内容をもつにもかかわらず、儀礼の文脈の中では両者は明確に区別されている。従来まで、インドにおける献供の儀礼といえば、プージャーがもっぱら注目されてきた。とくにヒンドゥー寺院における基本的な儀礼の調査や研究が行われた場合、プージャーを取り上げることが多い²⁾。これに対し、バリ儀礼は、「グリヒヤ・スートラ」(Gr̥hyasūtra: 家庭経) にふくまれる儀礼との関連で言及される以外は、まとまった研究はほとんどない。儀軌類にふくまれるバリ儀礼の研究や、実際に行われているバリ儀礼の事例の紹介もわずかである³⁾。しかし、「バリ」の語は『リグ・ヴェーダ』本集にすでにあらわれ、儀礼としてのバリも「グリヒヤ・スートラ」の時代にはすでに成立していた。仏教においてもパーリ仏典の中でバリ儀礼は何度も言及されている。しかも、バリ儀礼は現在にいたるまでインド文化圏のさまざまな地域で、さまざまな方法で行われている。インド世界の宗教儀礼の中でも、きわめて生命力の強い儀礼なのである。

インド密教の時代にもバリ儀礼は行われていた。「施食」や「施餓鬼」の名で漢訳経典の中に記されている儀礼の多くが、バリ儀礼に相当するのであろう。バリ儀礼が密教の儀礼体系の中心を占めることは決してなかったが、アビシェカ (abhiṣeka: 灌頂) などに代表される密教儀礼の組織化・体系化にともない、時代が下るにつれてバリ儀礼も複雑な構造をとるにいたる。

本稿ではインド密教で行われていたバリ儀礼の実態を明らかにし、それをもとにバリ

儀礼の性格や機能について考察してみる。まず、次節ではインド後期密教の代表的な儀礼文献である『ヴァジュラーヴァリー』(Vajrāvalī: 以下 VA) を取り上げ、とくにその中にふくまれる「バリ儀軌」(Balividhi) の章の内容を中心に、バリ儀礼の概要を紹介しよう⁴⁾。つづく第三節においては、「バリ儀軌」の章以外の VA の本文で、バリ儀礼がどのような場面で言及されているかを検討し、VA に説かれる諸儀礼の中でのバリ儀礼の位置づけを行う。また、同じバリ儀礼の名のもとで行われる儀礼の事例をいくつか取り上げ、それらとの比較をとおして、インド後期密教で行われていたバリ儀礼の特質を探る。

2. 資料の記述

概要

VA はインド後期密教を代表する学僧アバヤーカラグプタ Abhayakaragupta による大部のマンダラ儀軌である。全体は50の儀軌 (vidhi) にわかれ、このすべての名称が著者自身によって巻頭にしめされている。50の儀軌はおおきく4つのトピックにまとめることができる。マンダラ制作、プラティシュター (pratiṣṭhā: 寺院や尊像の聖別式)、アビシェーカおよびそれ以外の儀礼である。マンダラ制作方法ははじめに解説され、これにプラティシュターとアビシェーカが続く。これはプラティシュターとアビシェーカのいずれも、マンダラを儀礼の「装置」として必要とするためである。これら三つのトピックに属さない部分は、さまざまな小儀礼についての説明にあてられる。小儀礼は VA の主要な三つの儀式の中にもふくまれ、儀式全体をとおして何度も実践されるため、それぞれの小儀礼についての一般的な規定を独立させたのである。そして三つの主要な部分で逐一詳しく説明する必要がないように、VA の巻頭と巻末にまとめて配されている。ホーマ (homa)、アルガ (argha) の献供、妨害者の除去などがこれに相当し、バリ儀礼もそのひとつとして巻末近くで説明される。50の儀軌の中では第48番目に相当する⁵⁾。

ところで、バリ儀礼を説くインド密教の文献は VA に限られるわけではない。プトン (Bu ston) はチベット語に翻訳されたバリ儀軌を11点あげているが、これらのほとんどが現在のチベット大蔵経の各版に収録されている⁶⁾。バリ儀礼をあつかうこれらの諸文献のいくつかは VA よりもくわしい情報を含んでいる。またバリを主題としない文献でも儀軌や注釈書にはバリ儀礼に多くの紙幅をさくものがある。たとえば、アバヤーカラグプタ自身、『サンプタタントラ』 *Sampūṭatantra* (TTP, no. 26) への注釈書である『アームナーヤ・マンジャリ』 *Āmnāyamañjari* の中にバリの章をたて、その方法をくわしく説明している⁷⁾。そして VA の中でもバリ儀礼の詳細はこの自著を参照するよう指示して

いる。⁸⁾ インド後期密教のバリ儀礼の典拠としてVAを選んだ理由として、VAがこの時代の儀軌としてもっとも重要で、かつ権威ある文献であったことや、サンスクリット原典が現存していることがあげられるが、それ以上に、この文献全体の主題がバリ儀礼ではなく、プラティシュターやアビシエーカというさらに大規模な儀式であるため、バリ儀礼がそれらの中にどのように組み込まれ、どのように機能していたかを実際に知ることができるからである。

VAのバリ儀軌では、バリ儀礼の具体的な方法が秘密集会流 (sāmājika)、サンヴァラ流 (sāmvarika)、ヘーヴァジュラ流 (hevajrika) という三つの流儀にもとづいて解説される。いずれも「すべての生類へのバリ儀礼」(sārvabhautikabalividhi) という名称がつけられている。最後のヘーヴァジュラ流のバリ儀軌の説明を終えた後で、バリに関する補足的な説明もアバヤーカラグプタは行っている。三つの流儀の中でもっともくわしい内容をもつのが、はじめにとかれる「すべての生類への秘密集会流のバリ儀軌」である。残りのふたつの段落では、秘密集会流と共通する部分の説明は省略されている。アバヤーカラグプタはバリ儀礼を三つの流派にわけているが、流派による主要な相違点は、バリを与える対象と、そのときにとなえるマントラのみで、全体の流れはいずれの流派でもほとんど共通である。

VAのバリ儀軌に説かれるバリ儀礼全体の構成は次のように示すことができる。

A 準備

- A-1 儀礼行為者の準備
- A-2 供物の準備
- A-3 供物の浄化 (甘露の成就)

B バリ儀礼

- B-1 儀礼行為者の変容
- B-2 香マンドラの制作
- B-3 供犠の対象の招来
- B-4 インドラたちの変容
- B-5 諸尊へのバリ
 - B-5-1 マンドラの尊格へのバリ
 - B-5-2 十忿怒尊へのバリ
 - B-5-3 インドラたちへのバリ
 - B-5-4 ナーガへのバリ
 - B-5-5 すべての生類へのバリ
- B-6 プージャー
- B-7 百字のマントラによるおゆるし

B-8 諸尊の帰還、もしくは移動

必要に応じてVAの記述を引用しながら、個々のプロセスの内容を順におっていくことにしよう。

準備

アバヤーカラグプタはバリ儀軌の冒頭で、バリ儀礼を行う時期とその目的をつぎのように簡潔に述べる。

この書物の中で述べた儀軌や、あるいはそれ以外の儀礼に際し、[その儀礼の] 始まりとおわりに、妨害者を慰撫するためにバリを与える。

バリが何らかの儀礼の始まりとおわりに実践されることは、後でみるようにVAの他の儀軌の中でも確認できる。「妨害者」(vighna)を慰撫することがバリの目的としてあげられているが、VAの場合、妨害者にはヒンドゥー教の護世神(lokapāla)が想定されていることが、他の儀軌から知られる。⁹⁾

バリ儀礼の準備のはじめの二段階、儀礼行為者の準備(A-1)と供物の準備(A-2)はつぎのように述べられる。

はじめに師(ācārya)は宝冠など、入手できたもので[身体を]飾り、吉祥なる金剛薩埵の姿となり、米飯、アプーパ(apūpa)、パルパタ(parpata)、ラッドウカ(ladduka)、ジャンブ酒(jambudika)など、また魚、肉、タマネギ、ニンニク、酒、水、牛乳などを、花などもそえて、自分の前に置いた籠(piṭaka)などの大きな容器に、傘蓋などでも飾りながら、音楽などもはじめに奏してから入れる。あるいは、食物や水などだけでもよいので、入手したものを[容器の中に]入れる。そして[これらの]食物、食糧、舌でなめるもの、飲物を清める。

供物として列挙される米飯以下のもののうち、アプーパ、パルパタ、ラッドウカは小麦粉や砂糖、肉などで作った菓子で、ジャンブ酒はジャンブの果実から作った酒であろう。魚と肉には具体的な動物の名称はあげられていない。ナーガへのバリの供物は牛乳を主体とすることが後述されているが、それ以外の諸尊へのバリには、特定の供物は言及されていない。これらの供物が共通して与えられたのであろう。類似の供物の名称は『サーダナ・マーラー』(Sāadhanamālā)の中でも、やはりバリの供物として列挙されている(Bhattacharyya 1968: 538, 588 etc.)。

上記の引用文の最後の一文は、つぎのプロセスである「供物の浄化」(A-3)を行

う指示である。供物の浄化はつぎのような観想次第によって、精神的に実施される。

「ヤム」(yam) 字から生じた風輪の上に「ラム」(raṃ) 字から生じた火と「アハ」(aḥ) 字から生じた白い蓮華の容器、その上にのせた「オーム、アーハ、フーム」(om āḥ hūm) より生じた三脚を¹⁰⁾ [観想する]。その上で「フーム、ブーム、アーム、フリーヒ、カム、ブルーム、フリーヒ、ターム」(hūm būm āḥ hriḥ khaṃ bhrūm hriḥ tāṃ) という文字から生まれ、これらの [文字] によって聖化された、五種の甘露とともしびとを本質とする、そのような食物などを [観想し]、「ハ、ホー、フリーヒ」¹¹⁾ (ha ho hriḥ) の文字によって、順に [それらの] 本来の香り、色、効能を明らかにする。[風輪の] 風によってあおられて燃えさかる火の熱によって文字などを溶かし、その蒸気から生じた「フーム」字からあらわれた金剛杵のついたカトヴァーンガ (khatvāṅga) を溶かし、それ (食物) に三度降らせ、甘露へと変える。その上に「オーム」字から生じた月輪を観想し、それにのった「オーム、アーハ、フーム」という文字の光によって、十方にいらっしゃる諸如来の菩提心の甘露と、海などにある甘露と、三つの文字 (オーム、アーハ、フーム) と月もそこに入れ、三つの文字によって三度、清純な水銀のように聖化する。

不明な点がいくつかあるが、全体のイメージはつぎのようなものであろう。バリの供物となる食物などを蓮華の容器に入れて、三脚の上に置き、下から加熱する。蒸気から生じたカトヴァーンガを溶かして、食物の上にふり注ぎ、甘露へと変える。さらに、甘露の上に月輪と三つの文字を観想し、文字が発する光によって諸如来の菩提心を本質とする甘露と、海にある甘露などをさらに加えることによって、水銀のような純粋な甘露とする¹³⁾。

以上の準備のプロセスは、秘密集会流のバリ儀軌の中にのみふくまれ、サンヴァラとヘーヴァジュラの儀軌では言及されていないが、バリ儀礼一般の準備段階としてこれらの二流儀でも同じように行われたはずである。

バリ儀礼 (本儀礼)

狭い意味でのバリ儀礼は、つぎの「儀礼行為者の変容」(B-1) から始まる。「インドラたちの変容」(B-4) までのVAの記述はつぎのとおりである。

つぎに『ピンディークラマ・[サーダナ]』(Pīṇḍīkramasādhana) の儀軌か、あるいは『四支分の儀軌』(Caturāṅgavidhi) にもとづく順序によって、すみやかに金剛薩埵の姿をしたものは、自分の前に芳香などで香マンダラを作り、各々のマ

ンダラの主尊などのすべての如来を供養し、「阿閼金剛よ云々」と賛嘆し、忿怒尊をのせた十輻輪の中心におかれた楼閣の中にあるマンダラと、眷族をともなったインドラたち、ナーガたち、そしてすべての生類を、自分の胸の種子の光によって引き寄せ、インドラたちをすみやかに光に変えたあとで、[彼らが]秘密集会[マンダラ]の尊格の姿をすると観想し、まずはじめにパードヤ (pādyā) などを供える。

はじめに言及される二文献は、前者がナーガールジュナに帰せられる『五次第』(Pañcakrama)の前半部、すなわち生起次第を説いた『ピンディークラマ・サーダナ』で、後者はジュニャーナパーダ (Jñānapāda) 流の『四支成就法普賢母』(TTP, no. 2719)を指す。¹⁴⁾秘密集会タントラのインドにおける二大流派、聖者流とジュニャーナパーダ流の、それぞれもっとも基本的な文献である。VA や『ニシュパンナ・ヨーガーヴァーリー』(Niṣpannayogāvalī: 以下NPY) では26種のマンダラについて、制作方法や観想方法が解説される。¹⁵⁾ジュニャーナパーダ流と聖者流の二種のマンダラは、はじめの二つに相当する。儀礼行為者はこれらのマンダラのいずれかをこの後で観想するのであるが、その前に、自分自身がその中尊である金剛持へと姿を変える。なおジュニャーナパーダ流の秘密集会マンダラの中尊は文殊金剛とよばれ、また聖者流のそれは阿閼の名で呼ばれるが、これらの二尊とここで言及される金剛持はNPYの中で同一の尊格とみなされている。¹⁶⁾

「香マンダラ」とは顔料などを使わないで、香水などを地表に塗っただけのマンダラである。マンダラ制作の予備的な段階で、マンダラの尊格などを招請するために制作する。マンダラの観想と供養のための「場」として機能している (森 1991 b : 61, 67)。

「阿閼金剛よ」で始まる偈頌は、すでにVAの第17儀軌「尊像などのプラティシクターの儀軌」(Pratimādipratīṣṭhā)でその全文が示されているため、ここでは第一句のみを引用して残りの部分を省略している。¹⁷⁾もともとは「秘密集会タントラ」第17章冒頭にあらわれる偈頌で、五仏への称賛を中心とした内容をもつ。¹⁸⁾

胸の種子の光によって引き寄せられる対象、すなわちマンダラ、守護輪、眷族をともなったインドラたち、ナーガ、生類は、VAに説かれる三種のバリ儀軌のいずれにおいても共通であるが、マンダラを構成する尊格は異なっている。ここでは秘密集会の二種のマンダラのいずれか、次節以下ではそれぞれサンヴァラ、ヘーヴァジュラのマンダラになる。またそれにともない、守護輪にのった十忿怒尊のメンバーも入れ替わる。ここではヤマールタカをはじめとするもっともオーソドックスな十忿怒尊のメンバーが招請される。¹⁹⁾

このプロセスで注目されるのは、マンダラや守護輪とともに導かれたインドラたちのヒンドゥーの神々が、いったんマンダラの主尊へと姿を変えることである。このとき、

インドラたちはまず光となり、その後で、明妃をともなった秘密集会尊、すなわち中尊である文殊金剛、あるいは阿闍へと姿を変える。次節以下では招来されるマンダラにしたがって、サンヴァラ、あるいはヘーヴァジュラがそのかわりにあらわれる。

彼らバリの対象に供えられるパードヤは、神々を迎え入れたときに足を洗うために捧げられる。「パードヤなど」とアバヤーカラグプタが記すのは、他にも、敬意をあらわす水アルガ、口をそそぐ水アーチャマナ (ācamana) も差し出すからである。²⁰⁾

バリ儀礼の中核は、つぎの「諸尊へのバリ」(B-5)である。バリを与える対象はマンダラの尊格、十忿怒尊、インドラたち、ナーガ、すべての生類の順である。一部のマントラをのぞいて、VAの該当箇所を以下に示す。

鈴を鳴らしながら、金剛杵を振り、空性と慈悲が不可分となった菩提心についての確信をともないながら、「オーム、アーハ、何某金剛」(om āḥ amukavajra)と、自分のマンダラの主尊以下、スンバにいたるまでの各尊格の名を呼び、[各尊の]種子も唱えて、…ふたつのマントラとともに、三輪清浄²¹⁾によってバリを供えよ。さらにナーガ・バリのマントラも唱えながら供える。これもまた、マンダラの主尊からはじめて、スンバにいたるまで。つぎに、眷族をともなったインドラ以下に。つぎにナーガに。つぎにすべての生類に [バリを与える]。

マンダラの主尊からスンバ、すなわちマンダラにふくまれるすべての尊格に対して唱えるマントラは、形式が一定で、尊格の名を「何某」(amuka)のところに代入して唱える。秘密集会の二種のマンダラにふくまれる各尊のマントラは、すでに第10儀軌「瓶の招請の儀軌」(Kalaśādhivāsanavidhi)の中ですべてあげられ、種子マントラも一部の尊については明記されている(森 1994: 129-130)。全体の構成で示した「十忿怒尊へのバリ」(B-5-2)は、ここでは言及されていないが、これは、秘密集会のマンダラの場合、十忿怒尊がマンダラの構成要員として含まれるため、「マンダラの尊格へのバリ」(B-5-1)とは別にこれをたてる必要がなかったのである。なお、ジュニャーナパーダ流の秘密集会のマンダラには十忿怒尊のうちのはじめの四尊(ヤマーンタカ Yamāntaka、プラジュニャーンタカ Prajñāntaka、パドマーンタカ Padmāntaka、ヴィグナーンタカ Vighnāntaka)のみがマンダラにふくまれ、残りはマンダラの尊格とは必ずしもいえない。しかしマンダラを観想するときには、はじめに十忿怒尊すべてを招来することがNPYの中で指示されており(Bhattacharyya 1972: 1-2)、ここでもマンダラの尊格として一括してあつかわれている。

つづいて唱えられる「二種のマントラ」は、インドラたちに対してバリを与える時に唱えるマントラで、はじめのマントラは以下のとおりである。

すべての悪の誓約の印を破壊するものよ、私の息災と保護をなせ。スヴァーハー、フーム、オーム、アーハ。三世から生じ、十方の世界の無数の虚空・海・雲の集まり・広大な空間・原子・彩色マンダラの中に次々と内在し、三昧に住するものたちよ。法界に集まるものたちよ。虚空界にふくまれるものたちよ。三世から生じ、十方世界の無限の雲の集まり・広大な空間・虚空に等しきものたちよ。すべての世界の護衛者よ。すべての生類²³⁾よ。

つづいてふたつめのマントラが示される。

金剛の武器、幻の金剛、金剛の炎、金剛の時、金剛の棍棒、ナーガの金剛、金剛の火、金剛バイラヴァ、金剛の酔者、金剛の忿怒、金剛クンダリン、金剛の輝き、聖者の金剛、ヴェーマチトリン、地神よ。眷族をともなったものたちよ。花、香、灯明、塗香、食事などをあわせたバリの供物を受けよ。摂取せよ、私の金、黄金、財宝、穀物、生命、若さ、健康、真の樂を持ち去るものを、すべての障害のヴィナーヤカたちを、すべての悪の中の悪を、人と人にあらざるものを、砕け、とどまらせ、結び付け、粉々にせよ。私の金、黄金、財宝、穀物、生命、若さ、健康、真の樂と大いなる樂を増大させるために、悟りの境地に到達するまで、もたらせ。正しき援助を、息災を、保護をなせ。フーム。²⁴⁾

第二のマントラのはじめの「金剛の武器」以下の15の名称は、バリの対象であるインドラ以下のヒンドゥー神を指す。各名称がインドラなどのいずれの神と対応するかは少し後で、アバヤーカラグプタ自身が明らかにしている。

「ナーガへのバリ」（A-5-4）の時には、とくに「ナーガ・バリのマントラ」とよばれるマントラが唱えられる。ここでは具体的なマントラはあげられていない。すでに第18儀軌「池などのプラティシュター」（Puṣkarīṇyādipratīṣṭhā）において、その全文が示されているからである。以下のように、そこではナーガの王たちの名が列挙されている。

オーム、アナンタよ、ヴァースキよ、タクシャカよ、カルコータカよ、パドマよ、マハーパドマよ、シャンカパーラよ、クリカよ、パーラよ、デーヴァティよ、マハーデーヴァティよ、ソーマシキよ、マハーシキよ、ダндаダラよ、マハーダндаダラよ、アパラーラフルンダよ、ナンダよ、ウパナンダよ、サーガラよ、マハーサーガラよ、タプタよ、マハータプタよ、シュリーカーンティよ、マハーカーン

ティよ、ラトナカーンティよ、スヴァルーパよ、マハースヴァルーパよ、バドラーヒカよ、マホーダラよ、シリよ、マハーシリよ、オーム、食べよ、来たれ、来たれ、偉大なナーガの主よ、すべて、プール、ブヴァハ、プム、プム、スヴァーハー²⁵⁾。

バリ儀礼の終結部（B-6～8）はつぎのとおりである。

アーチャマナ、手の洗淨水、キンマ (tāmbūla) などを与えてプージャーを行い、儀礼を完遂できるように心をくたくものたちに許しを請い、先述した百字の [マントラ] を唱え、「オーム、すべての存在物はヨーガが清浄である。私はヨーガが清浄である²⁶⁾」と唱えながら、蓮華の輪と抱擁の印²⁷⁾とを結び、自分の尊格のマンダラを自分自身に入れる。守護輪にのった十忿怒尊と、インドラなど守護をもっぱらとするものたちは、マンダラの家屋の外の方方に配置する。マンダラの儀礼行為 (maṇḍalakarman) に着手し、[儀礼の] 最後にまでいたる。一方、彩色マンダラのご帰還の直後には、このようにバリを与えることなどを行い、忿怒尊も自分に入れ、三度、指を鳴らしながら、インドラなどを各自の位置に応じて帰還させる。

はじめのプージャーの対象は明記されていないが、バリの対象と同じであろう。百字のマントラは第17儀軌「尊像などのプラティシュター」ですでにあげられている²⁸⁾。『金剛頂経』(真実撰経 *Tattvasaṃgraha*) などにも登場し、よく知られたマントラである(堀内 1983: 203-204)。これに続く「諸尊の帰還」(B-8)の部分は、バリを何らかの大きな儀式の前に行う場合と、後で行う場合とで異なる。「マンダラの儀礼行為」とはVAで説かれる主要な儀式であるマンダラの制作と、それに続くプラティシュターあるいはアビシェーカを指す²⁹⁾。儀式の前にバリを行った場合、バリの対象となったものうち、マンダラの尊格は儀礼行為者自身の中に入れられ、十忿怒尊とインドラはマンダラの家屋の外に移動される。彼らはそこでマンダラの守護にあたる。儀礼の最後に彩色マンダラを壊し、マンダラの諸尊が帰還した後にバリを行う場合、忿怒尊も自分自身の内部に入れ、インドラたちは本来、彼らが住む世界の十方へと帰還するようにうながされる。

定期的なバリ

アバヤーカラグプタは以上のバリの儀式次第を述べた後で、毎日、あるいは毎朝夕に行うバリについて、つぎのように述べる。

これとは別に、毎日、あるいは毎朝夕にバリを与える場合はつぎのとおりである。これが帰還のマントラである。

「オーム、汝らは衆生に利益をお与えになった。[衆生の] それぞれに応じた成就をお与えになった。私の国土にお帰り下さい。再びいらっしやいますように」

「オーム、アーハ、フーム、「ア」字は門である。すべての存在物は本来、生じたものではない故に」³⁰⁾あるいは「アーハ、フーム、ヴァジュラよ、ムッフ」(om aḥ vajra muḥ) と唱えながら帰還を願う。…マンダラの家屋の外で、東以下の各方角に十忿怒尊の土団子 (mrtpiṇḍa) を、またそのすぐ近くにはバリの食物などを大きな籠 (bhārapitaka) か、鉢 (śarāva) にひとにぎりずつ供えよ。土団子の外側に15の土団子と、それがなければ、香マンダラの上のインドラなどの15尊に対し、八方で [バリを] 供えよ。…インドラなどの15の旗は各自の色で、各自の方角におく。インドラ以下の土団子の外に、八つの土団子、もしくは牛糞で作った香マンダラの上のナーガに対しては、鉢で乳粥などを与える。外側でもバリの食物などとギー (ghṛta)、蜜、水、牛乳、酒の5種を右まわりに撒く。

まずはじめに帰還のマントラが異なることが示される。マントラの前半部分は偈頌で表現され、チベット訳テキストも音写せず意識している。十忿怒尊とインドラたちには、マンダラの家屋の外でバリが与えられる。いずれも各尊をあらわす土団子を作り、これに対してバリを与える。土団子を作らない場合、香マンダラで代用する。「インドラなどの15の旗」という語は、この部分からだけでは何を指しているのかははっきりしない。VAの第15儀軌「マンダラの成就」(Maṇḍalasādhana)において、アバヤーカラグプタはマンダラを完成させた後で、インドラをはじめとする15神を喜ばせるために、マンダラの家屋の外側にさまざまな色の15の旗をたてよと述べる。そこであげられている15の神々はバリ儀礼でバリの対象となっているヒンドゥー神にほぼ対応している。ヒンドゥー神を象徴する土団子と旗の外側には、八匹のナーガをあらわす八つの土団子を置き、乳粥をバリとして与える。

引用文では省略したが、この段落ではインドラなどのヒンドゥー教の神々の名称と位置も示されている。彼らは15神で構成されているが、位置が自明なものは言及されていない。これを東から順に右まわりに示すとつぎのようになる。すでにあげたマントラの中での異称と、「マンダラの成就の儀軌」の中に規定された旗の色もあわせて示す。

位置	名称	異称	旗の色
東	インドラ (ウバーンドラ)	金剛の武器	黄

東	ヴィシュヌ ³¹⁾	幻の金剛	黒
南東	アグニ	金剛の炎	赤
南	ヤマ	金剛の時	黒
南西	ニルリッティ	金剛の棍棒	灰色
南西	ヴェーマチトリン		黒
南西	地神		黄
西	ヴァルナ	ナーガの金剛	白
北西	ヴァーユ	金剛の火	緑
北	クベーラ	金剛バイラヴァ	黄
北	ヴィナーヤカ ³²⁾	金剛の酔者	白
北東	イーシャーナ	金剛の忿怒	白
北東	スーリヤ	金剛クンダリン	赤
北東	チャンドラ	金剛の輝き	白
北東	ブラフマー ³³⁾	聖者の金剛	黄

インドラ、アグニ、ヤマ、ニルリッティ、ヴァルナ、ヴァーユ、クベーラ、イーシャーナの八神は八方向の護世神で、さらに上下を占めるブラフマーと地神 (Prthividevatā)、スーリヤ、チャンドラという日月神、至高神ヴィシュヌ、ガナの王ヴィナーヤカと、アスラの王であるヴェーマチトリンを加えている。

サンヴァラ流のバリ儀礼

サンヴァラ流のバリ儀礼とハーヴァジュラ流のバリ儀礼では、アバヤーカラグプタは準備段階の説明は省き、儀礼行為者をマンダラの中尊へと姿を変える「儀礼行為者の変容」(B-1) から説明を始める。サンヴァラ流のバリ儀礼で、実際にバリを供えるまでの記述は以下のとおりである。

また、吉祥なるチャクラサンヴァラの姿をしたものが、香水などで香マンダラを作り、自分のマンダラ(チャクラ)にプージャーを行い、「八つの句からなるマントラ」³⁴⁾によって賛嘆し、自分の胸の「フーム」字の光によって、忿怒尊をのせた十輻の守護輪の中心にのった楼閣の中央にあるマンダラと、守護輪の外の各方向に、眷族をつれたインドラ以下の[護世神]と、数えきれない生類とを虚空に導き、額の上で「光輝」³⁵⁾の印を作り、ほこらしげに「パット」(phat)と三度唱え、香マンダラの前にお導きする。「オーム、カッカ、カッタナ、つなげ、結び付けよ、カッカ、噛め、すべての悪の、殺せ、殺せ、ガ、ガ、殺戮せよ、何某の

息災をなせ、フーム、フーム、パット、パット、ジャハ、スヴァーハー³⁶⁾というこのマントラを唱えながら、インドラなどを引き寄せ、すみやかに空性へと変えて、明妃をともなったサンヴァラ尊のおからだになったと観想し、パードヤなどをまずはじめに供える。

儀礼行為者が観想し、引き寄せるマンダラがサンヴァラマンダラに変わり、それにともない、儀礼行為者も中尊チャクラサンヴァラの姿をとる。そして、この尊を称賛する「八句のマントラ」を「阿閼金剛よ云々」のかわりに唱える。サンヴァラマンダラには六尊マンダラ、14尊マンダラ、62尊マンダラなどさまざまな種類があるが、ここで観想されるのは、VA や NPY の中で説かれる62尊マンダラである³⁷⁾。

諸尊へのバリはマンダラの尊格であるチャクラサンヴァラとその明妃、周囲のダーキニーたち、続いて守護論にのった十忿怒尊³⁸⁾、そしてインドラたちに与えられる。ナーガとすべての生類についての言及はないが、秘密集会流と同じであるため、省略されたのであろう。チャクラサンヴァラ以下、インドラたちの護世神まではそれぞれ別のマントラがバリを与えるときに唱えられる。

まず中尊チャクラサンヴァラに対してはつぎのようなマントラが唱えられる。

オーム、ヴァジュラダーカよ、このバリを取れ、取れ、フーム、パット、オーム、ジャハ、フーム、ヴァム、ホーホ。請願である、汝は。見よ。ホーホ³⁹⁾。

続いて「三輪の尊格」すなわち、意輪、口輪、身輪にのるダーカとダーキニーたちには、意味不明の音を多く含むつぎのようなマントラが唱えられる。

オーム、為せ、為せ、行え、行え、結び付けよ、結び付けよ、威嚇せよ、威嚇せよ、扇動せよ、扇動せよ、フラウム、フラウム、フラハ、フラハ、ホーム、ホーム、輝け、輝け、燃やせ、燃やせ、料理せよ、料理せよ、食べよ、食べよ、脂肪、血、内臓の環の垂れ下がったものを、つかめ、つかめ、七種の地底に住む蛇を、あるいは、指させ、指させ、引き寄せよ、引き寄せよ、フリーム、フリーム、ジョーム、ジョーム、クシュマーム、クシュマーム、ハーム、ハーム、ヒーム、ヒーム、フーム、フーム、キリ、キリ、シリ、シリ、ヒリ、ヒリ、デイリ、デイリ、フーム、フーム、パット、スヴァーハー⁴⁰⁾。

十忿怒尊とインドラたちへのマントラもつぎのようにかわる。まず十忿怒尊はそれぞれ
の名称が含まれるつぎの十のマントラである。

「オーム、ヴァジュラドリクよ、ヴァジュラフームカーラよ、ヴァジュラよ、フーム、パット」(以下「オーム、 x ヴァジュラよ、フーム、パット」の形式で x の部分に各尊の名が挿入される。 x の部分のみあげる)「ヴァジュラダダよ」「ヴァジュラアナラールカよ」「ヴァジュラクンダリンよ」「ヴァジュラヤクシャよ」「ヴァジュラカーラよ」「ヴァジュラマハーバラよ」「ヴァジュラビーシャナよ」「ヴァジュラウシュニーシャチャクラヴァルティンよ」「ヴァジュラパーターラよ」⁴¹⁾

インドラたちへのマントラにはつぎのものがあげられている。

オーム、カ、カ、カーヒ、カーヒ、すべてのヤクシャ (夜叉)、ラークシャサ (羅刹)、ブータ (鬼神)、プレータ (屍鬼)、ピシャーチャ (食肉鬼)、ウンマーダ (狂者)、アパスマーラ (憑依者)、ダーカ、ダーキニーなどよ、このバリを受け取れ、誓約を守れ、すべての成就を我に与えよ、フーム、フーム、パット、パット、スヴァーハー。⁴²⁾

類似のマントラが『サーダナマラー』の中にも「バリマントラ」の名で示されている。⁴³⁾

諸尊の帰還の前に唱えられる百字のマントラも、先述のものに一部手を加えて、サンヴァラにふさわしい内容をもったマントラに変えられている。⁴⁴⁾

ヘーヴァジュラ流のバリ儀礼

ヘーヴァジュラ流のバリも全体の構成は前のふたつの流派とほとんど同じである。儀礼行為者はヘーヴァジュラの姿をとり、忿怒尊がのった十輻の守護輪とその中心におかれた楼閣の中のマンダラ、そして眷族をひきつれたインドラなどの護世神、そして数えきれない生類を引き寄せる⁴⁵⁾インドラたちを光の中に入れ、ヘールカの姿に変化したと明瞭に観想する。

NPY と VA ではヘーヴァジュラマンダラは中尊のヘーヴァジュラの臂数に応じて、四臂、六臂、16臂の三種類がある。ヘーヴァジュラの明妃は四臂の場合、ナイラートミヤーであるが、残りのふたつのタイプではヴァジュラヴァーラーヒーに変わる。ここでは、明妃の名称としてナイラートミヤーがあげられていることから、第一のヘーヴァジュラマンダラを想定して説明を行っていることがわかる。ヘーヴァジュラのまわりの尊格はいずれのマンダラにおいても共通で、ヴァジュララウドリー (Vajraraudri) などの16尊から構成される。

前段のサンヴァラ流のバリ儀軌と同様、ここでもバリを供えるときに唱えられるマン

トラが段落の大半を占める。中尊ヘーヴァジュラに対しては、

オーム、デーヴァピチュヴァジュラよ、このバリを取れ、取れ、何某の息災と守護を為せ、フーム、フーム、フーム、パット、スヴァーハー。⁴⁶⁾

というマントラがあげられている。

ナイラートミヤと周囲の16尊には「オーム、アーハ、ナイラートミヤーよ」(om āh nairātmye) という各尊の名称を挿入したマントラと、各尊の種子マントラを唱え、さらに「何某の息災と守護を為せ、スヴァーハー、フーム」(amukasya śāntim rakṣām kuru) と唱えながらバリを与える。十忿怒尊には「一切仏に帰依したてまつる」で始まり、それ以外の部分が各尊ごとに異なる十種類のマントラをアバヤーカラグプタは列挙している。⁴⁷⁾ 各マントラには「このバリを受け取れ、受け取れ」(imaṃ baḥiṃ grhna grhna) という文を挿入せよという指示もアバヤーカラグプタはこの後で加えている。インドラたちへのマントラは、土着の言葉と思われる難解な文章に、秘密集會流でも現れた「オーム、ア字は門である・・・」という一文を加えたマントラがあげられている。⁴⁸⁾

3. 考 察

前節で紹介したVAのバリ儀礼の内容をいくつかの要点にしぼって整理してみよう。

アバヤーカラグプタによれば、バリ儀礼は何らかの儀礼の始まりと終わりに、妨害者を慰撫するために行われる。また、これとは別に、毎日、あるいは毎朝夕に行う定期的なバリ儀礼もある。何らかの儀礼の前後に行うバリ儀礼は、観想するマンダラの種類に応じて、三種類の流儀が紹介されたが、儀礼全体の構成や順序は、いずれの流儀でもほとんど共通である。

バリ儀礼の対象となるのは、マンダラの中尊とマンダラに含まれるそのほかの尊格、十忿怒尊、インドラたちのヒンドゥー神たち、すべての生類、そしてナーガである。この順序でバリが与えられる。バリを与えるときには、対象ごとに、それぞれ対応するマントラが唱えられる。マンダラの主尊と十忿怒尊は流儀ごとにメンバーが変わるため、マントラもそれぞれに応じたものとなる。インドラたちのヒンドゥー神に対するマントラも三つの流儀でそれぞれ異なる。

バリ儀礼の供物には米飯や菓子、肉、魚、酒などがあげられている。花、灯明、香、塗香などを供えるプージャーの儀式とは異なり、食物、飲物が中心となっている。これらの食物の供物は、与えられる前に「甘露の成就法」という瞑想のプロセスをへて、甘露の本質をそなえる。ナーガには牛乳や乳粥が与えられる。

バリ儀礼はおもに「マンダラの家屋」の中で行われる。「マンダラの家屋」とは、マンダラを制作し「マンダラの儀礼行為」すなわちプラティシュターやアビシェーカを行う建造物をさす。儀礼行為者はその中で「香マンダラ」を地表に作り、マンダラを招来する。行者の瞑想の世界の中では、引き寄せられたマンダラは楼阁の中にあり、楼阁は十忿怒尊をのせた十輻輪に守られている。マンダラや守護輪に含まれないバリの対象、すなわちヒンドゥー神、すべての生類、ナーガはさらにその外側でバリを受ける。儀礼のはじめに行われるバリの場合、ヒンドゥー神も「マンダラの家屋」の中でバリが与えられる。そしてバリを終えた後、「マンダラの家屋」の外に、十忿怒尊とともに移動される。すべての生類とナーガについては、バリを与える場所についてのくわしい規定はない。これに対し、定期的なバリの場合、十忿怒尊もインドラたちのヒンドゥー神も「マンダラの家屋」の外でバリが与えられる。このとき、十忿怒尊と15柱のヒンドゥー神、8匹のナーガの王を表すために、それぞれの数の土団子を作り、決められた方角に置き、これに対してバリを与える。

VAの中でバリ儀礼が占める位置

VAの「バリ儀軌」は、このようなバリ儀礼の詳細を説明した部分であるが、実際には、毎日行う定期的なものをのぞいて、バリ儀礼は他の儀礼の中に組み込まれて遂行される。したがって、VAの他の部分には、「バリ儀礼を行え」という指示が随所にみられる。バリ儀軌の章をのぞくVAの他の部分ではバリの用例は26回を数える⁴⁹⁾。これらのバリ儀礼が他の儀礼のどこに組み込まれているかを調べてみよう。不明なものが一例あるが、儀礼の始まりに行われるものが10例、儀礼の終了時に行われるものが13例、それ以外が2例である。儀礼の始まり、あるいは終わりに行われる用例のうち、同一の儀礼に含まれるものが4組8例ある。すなわち4種の儀礼においては、始まりと終わりでバリが実行されるということである⁵⁰⁾。26例のほとんどは、アバヤーカラグプタが定義するバリを行う時期に一致している。バリ儀礼は特定の儀式の始まりか終わり、もしくはその両者において実施される例が圧倒的に多い。

バリの対象は明らかにされていないものも多いが、護世神、マンダラを描く土地に住む神、地神、十忿怒尊、行者の守り本尊 (iṣṭadevatā)、ナーガなどが現れる。地神とナーガはそれぞれ2回ずつ登場する。池に向かってバリを行うという例もあるが、これはおそらく池に住むナーガへのバリと考えられる。この他に「各方位へのバリ」(digbali)という名称も4回あらわれるが、これも各方位を守る護世神へのバリ儀礼と理解すべきであろう。VAのほぼ巻末におかれたバリ儀軌を指して、「後述のバリ儀軌にしたがって」バリを実行するように指示する箇所も多く、バリの対象はバリ儀軌に登場した尊格や神々の域をでるものではないことが確認できる。

VA の中に説かれる諸儀礼の中でバリが占める位置をさらに明確にするため、同じく尊格などを対象に何らかの供物を捧げる他の儀礼の用例と比較してみよう。

供物を供える代表的な儀礼はプージャーであるが、VA の中でプージャーを行えという指示は40例以上を数える⁵¹⁾。プージャーの供物は明記されていないことが多いが、「花など」と花を第一にあげるものが多く、他に線香、塗香、灯明などがある。プージャーの対象は多岐にわたるが、その多くは仏、菩薩などの尊格で、マンダラの尊格やマンダラそのものも多い。地神、ナーガ、ヴァルナなども含まれる。マンダラの墨打ちのための糸、プラティシユターの対象である仏塔や尊像、数珠などの尊格以外のものもあるが、いずれも神格化された存在で、単なる「もの」ではない⁵²⁾。神格化された尊像などをのぞき、これらの対象の多くはバリ儀礼の対象と重なるもので、対象に応じてバリとプージャーが使い分けられているのではないことがわかる。しかも、バリ儀礼の中でもプージャーの用例は2例あり、ここではバリの対象がプージャーの対象に一致している。またプージャーと平行してバリを行う例がこの他にも8例数えられる。

何らかの対象に捧げものをする儀礼は、この他にもアルガの献供がある。水を中心とした供物を供えるアルガの献供には、狭義のアルガ (あるいはアルギヤ arghya)、パードヤ、アーチャマナの3種があり、「アルガ儀軌」の中で供物の内容や供え方などの詳細が説かれている。アルガ儀軌以外の段落で、これらの水を供えよという指示は22例ある⁵³⁾。3種の水すべてがあげられている例が7例、アルガとパードヤを供えるという例が2例、アルガのみを単独であげる例は9例あるが、このうちの4例は「アルガなど」(arghādi) という表現をとり、他の水もその中にふくまれている。パードヤが単独であげられている例は4例あるが、いずれも「パードヤなど」という表現をとる。アーチャマナはアルガとともに言及されることが圧倒的に多いが、一回だけ単独で「アーチャマナを供えよ」と指示されている。

アルガの対象には尊格、マンダラ、尊像、地神、護世神などがあげられる。アルガの用例のうち10例は同じ対象にさらにプージャーを与えるよう指示されている。ただし、これらの用例では、アルガもプージャーも観想のプロセスの中で行者が観想の対象の智恵薩埵 (jñānasattva) を引き寄せ、自分の体内においた三昧耶薩埵 (samayasattva) と合一させる過程で言及される。すなわち、智恵薩埵 (マンダラの場合は「智恵マンダラ」 jñānamāṇḍala あるいは「智恵の輪」 jñānacakra とよばれる) をみちびいたときに、これに対してアルガなどをまず供え、三昧耶薩埵と合一させた後で、花などでプージャーを行うのである。

アルガの献供やプージャーの対象はバリの対象と重なるものが多い。これらの三者の間には、供物の種類が異なるという点の他に、行う時期のちがいがあがる。バリ儀礼が儀礼の始まりや終わりという決まった位置で行われたのに対し、プージャーやアルガはよ

り頻繁に行われ、儀礼全体の中の決まった位置を占めることはない。観想のプロセスでの登場の仕方で見られたように、プージャーやアルガは儀礼全体ではなく、儀礼の中に含まれるいくつかの観想法のプロセスの中で決まった位置を占めている。このことは Staal (1979: 15-19) の示す儀礼の構造のモデルを用いると説明しやすい。彼によれば、儀礼の構造を特徴づけるものに「はめ込み」(embedding) という概念がある。儀礼はいくつかのユニットから構成され、このユニットはさらに細かな単位からできていることが多い。ユニットやその下位の小単位の付加や削除、あるいは入れ替えによって別の儀礼が生み出される。儀礼の始まりや終わりという定位置を占めるバリは、儀礼全体を構成するユニットである。これに対し、アルガの献供やプージャーは儀礼のユニットである観想法や瞑想法を構成する小単位であり、バリよりも下位の構成要素なのである。⁵⁴⁾ バリ儀礼の中にもアルガの献供やプージャーがふくまれるのはそのためであり、その逆の用例は VA にはない。

バリ儀礼の目的と対象

VA のバリ儀礼は、およそ12世紀初頭に実際にインドで行われていたものであるが、インド密教の伝統を受け継いだチベットやネパールでも、バリの名でよばれる儀式が、現在でも行われている。

Beyer はチベット仏教におけるターラーの信仰形態をまとめた大著において、バリ儀礼を紹介している。バリはチベット語では「トルマ」(gtor ma) と訳されるが、現在ではトルマは色のついた小麦粉やバターで作った独特の形態の供物を指す。トルマには高さ数センチ・メートルの円錐形をした小さなものから、数十センチ・メートルの高さをもち、円や三角形を組み合わせた複雑な形態をしたものまでさまざまである。Beyer によればトルマは主要尊、護法尊、土地の神、六道の衆生の四つのカテゴリーに供えられる (1978: 165)。この分類は VA のバリ儀礼の対象であるマンダラの尊格、十忿怒尊、ヒンドゥー神、すべての生類にほぼ対応する。Beyer はトルマの制作方法や供える手順などについても詳細に述べている (1978: 340-345)。

Beyer の示すバリの対象は、すでにツォンカパ (gTsong kha pa) の時代でも同じであったようだ。ゲルク派の開祖ツォンカパは、彼の主著『真言道次第』*Sngags rim chen mo* の中でバリ (トルマ) について説明を行っている。⁵⁵⁾ その中で彼は、「チベットのラマたちが、マンダラの尊格と行者自身の護法尊に対しては内の [出世間の] バリを供え、外では土地の神やヒンドゥーの護世神への世間的なバリを行っている」と述べる。そしてその背景として「自己の本尊とインドラたちにバリを [供える]」と VA の中でアバヤカラグプタが述べていることを示すとともに、サラハ (Saraha) やディーパンカラバドラ (Dipaṅkarabhadra) たちは、土地の守り神と護世神以外にはバリを供えることを述

べていないが、ヴィブーティ (Vibhūti) は「自己の [守護尊への] バリを供え、外では各方位のバリ (護世神へのバリ) を別々に実践せよ」と述べ、ふたつの立場があったことを紹介している。

カトマンドゥ盆地の仏教徒たちが行うバリ儀礼も、インド後期密教のバリの伝統を受け継ぐものであろう。ここでのバリは、ヒンドゥー教の神々や鬼神たちへの施食供養という性格が強いが、Gellner (1993 : 289-290) の紹介するチャクラサンヴァラのバリ儀礼では、これらの下級神ばかりではなく、サンヴァラをはじめとする仏や菩薩たちもバリを与える対象となっている。またバリが年中儀礼として行われる事例も報告されており (服部 1991)、そこでもインドラたちや鬼神を対象とする狭義のバリ儀礼に先立ち、サンヴァラ・マンダラの観想と供養が行われる。

ツォンカバが言及する「土地の守り神と護世神のみへのバリ」は初期の密教経典の中にもしばしば見いだすことができる。たとえば所作タントラに分類され、体系化された初期の密教儀礼を伝える『蘇婆呼童子請問經』には、「施食」の儀礼があらわれる。すなわち、「天 (deva)、修羅、葉叉、龍、伽路羅 (garuḍa)、共命鳥 (?), 羯叱布單那 (katapūtana)、乾闥婆 (gandharva)、部多 (bhūta)、諸鬼魅等」に対し「華鬘、塗香、焼香、飲食、妙灯明」とともに「諸飲食」を供えて、彼らを満足させると述べる。そして、インドラ以下の護世神とブラフマー (梵天)、地神 (地居所有諸大神) にむかって、供物を受けるように請願する。⁵⁶⁾

鬼神や葉叉、羅刹へのバリは、パーリ語の仏典の中に頻繁に登場する。ジャータカ類にみられるバリ儀礼については、すでに奈良康明氏 (1975) や片山一良氏 (1974, 1975) によって詳細な研究が行われている。これらによれば、初期の仏教徒たちの行っていたバリ、あるいは仏典に記述されたバリは樹神、ヤッカ (yakka)、ナーガ、山の神、海の羅刹、土地の守護神たちに対して行われた (奈良1975 : 126)。供物は山羊、豚、鶏、魚などの肉、酒、種々の食物などの他に、血や、動物や人間そのものを供犠にすることもあったらしい (片山 1974 : 87-89)。バリを行う目的は、諸神の慰撫、無病息災、長寿、繁栄などの世俗的な願かけが大半を占める。そのため奈良氏はバリ儀礼を「祈願儀礼」と呼んでいる。また原始仏教のバリ儀礼の伝統を受け継ぐスリランカでは、人の運命を支配する星神に対し、運命の好転を願う「願かけ」が、バリ儀礼の名のもとで現在でも盛んに行われている (片山 1975)。

仏典にあらわれるこのようなバリ儀礼の用例を見てみると、この儀礼は本来、願かけを目的とした施食であったものが、その対象を上位の仏や菩薩にも広げ、ツォンカバが記すように、後期密教では「世間的なバリ」と「出世間的なバリ」という二段階の構造をとるにいたったとみなすことができるかもしれない。しかし、初期密教の施食儀礼はともかく、VA に説かれるバリ儀礼の起源をパーリ語仏典のバリに求めるには、目的、

対象、方法などに関する両者のちがいはあまりに大きい。また、民衆レベルの「祈願儀礼」だけをベースに後期密教の複雑なバリ儀礼の体系ができあがったとも考えにくい。

「バリ」の語は古くは『リグ・ヴェーダ』や『アタルヴァ・ヴェーダ』の中に見いだされることが知られているが、この場合はインドラやアグニへの「供物」や「貢ぎ物」そのものを指していた(片山 1974: 81)。食物を中心とした供物を特定の神々などに供える儀礼行為としてのバリは、「グリヒヤ・スートラ」の中にしばしば登場する。⁵⁷⁾「バリ」の語があらわれるのは、おもに「グリヒヤ・スートラ」の中のヴァイシュヴァデーヴァ(vaiśvadeva: 一切神への献供)と五大祭(pañcamahāyajña)の箇所である。ヴァイシュヴァデーヴァとは「朝夕の調理した食事の一部を祭火に献じ、その後、家の中のさまざまな場所にさまざまな神、ブータ、祖霊などに捧げる」儀礼である(永ノ尾 1992: 83)。一方の五大祭は「家長の日々行う義務」として「グリヒヤ・スートラ」の中で言及され、『マヌ法典』などにおいても規定されている。バラモンへの供犠、祖霊への供犠、神々への供犠、精霊への供犠、人間への供犠からなる。⁵⁸⁾ヴァイシュヴァデーヴァと五大祭は、それぞれ別の起源をもつと考えられているが、「グリヒヤ・スートラ」の中ではこの両者は重複してあらわれることが多い。⁵⁹⁾すなわち五大祭のバラモンへの供犠をのぞいた四種の供犠を総称してヴァイシュヴァデーヴァとよび、さらにこれが「バリ供」(baliharana)という名称をもつ。ただし、本来「バリ供」は、諸神へバリを与えるヴァイシュヴァデーヴァの儀礼の後半部だけを指していたらしい。一方の五大祭中の精霊への供犠のみをバリとよぶこともあり、バリ儀礼の指す内容の複雑さを示している。

「グリヒヤ・スートラ」に規定されるヴァイシュヴァデーヴァはつぎのような儀礼である。⁶⁰⁾ヴァイシュヴァデーヴァは毎日、薄暮薄明に行われる。その日に食する食事の一部を、まずはじめにアグニ(Agni)、ソーマ(Soma)、ブラジャーパティ(Prajāpati)たちのために火中に投じる。その後、焼供の残りの食物を家の神々にまず供え、諸方位の神々に供えた後、戸外に出て祖霊、鬼霊に順に捧げる。諸方位の神々は、文献によってメンバーの異同があるが、インドラ、ヤマ、ヴァルナなどの護世神が中心で、さらに日月神や星宿神などもこれに含まれる。最後の鬼霊への供物は地面や空中にはき捨てられる。

ヴァイシュヴァデーヴァとVAの説くバリ儀礼との間には、供物を与える対象の順序が重なりあう。すなわち、ヴァイシュヴァデーヴァでは献供の対象は、家の祭火を中心に次第に外に向かい、最後は屋外の祖霊と鬼霊に捧げられた。⁶¹⁾VAではマンダラが「家」の代わりとなっている。まずはじめにマンダラの中尊とマンダラの神々にバリを供え、つぎにマンダラを守る守護輪の尊格、十忿怒尊が対象となる。インドラ以下の護世神や日月神、さらに精霊や鬼神はヴァイシュヴァデーヴァと同じである。すべての生類も五

大祭の祖霊への供犠で、献供の対象としてあげられている。

アバヤーカラグプタは妨害者を慰撫するためにバリを行うと定義しているが、これだけをバリ儀礼の目的であるとみなすことはむずかしい。VA に説かれるバリ儀礼では、「妨害者にキーラを打つ」などの他の儀軌において妨害者と呼ばれているヒンドゥー教の護世神ばかりではなく、スーリヤやチャンドラ、ヴィナーヤカ、ヴィシュヌなどまでふくまれた。ヴィシュヌをのぞき、彼らはいずれもヴァイシュヴァデーヴァで家の神々としてバリを受け取るものたちであった。アバヤーカラグプタのいうように彼らが妨害者であったからバリを与えるのではなく、むしろバリの対象としてすでに存在しているため、彼らを慰撫するという理由がバリに与えられたと考えた方が自然である。さらに、これらのヒンドゥー神ばかりではなく、VA ではマンダラの尊格や十忿怒尊がまずはじめにバリの対象となった。アバヤーカラグプタのバリの定義だけでは、なぜバリの対象をここまで広げなければならなかったかは説明できない。

バリの対象のこのような広がり、ヒンドゥー教のバリでも共通である。一部のヒンドゥー・タントリズムではバリは動物供犠を指すが、⁶²⁾一般に行われるバリはVA のそれにきわめて近い様相を示す。たとえば Gupta (1979 : 139-157) はカウラ Kaula 派のプージャーの儀式を紹介するが、女神の瞑想と献供を中心に構成されたこの儀礼の最終段階で、ホーマに続いてバリが行われる。バリの対象は女神の配偶神であるヴァトゥカ (Vatuka) や取り巻きのヨーギーたち、土地の神 (kṣetrapāla)、ガネーシャ、ブータである。行者は瞑想の対象である尊像の横にマンダラを描き、これらのバリの対象をその上に呼び寄せ、まずはじめにアルガを供えてから施食を行う。このような儀礼の手順はもちろん、女神を中心とした儀礼対象の広がり、VA のそれによく対応する。類似のバリは『カーリカー・プラーナ』(Kālikāpurāna) の中でも説かれているし (Kooij 1972 : 21, 52, 110)、同じカウラ派のものは Goudriaan によっても紹介されている (Goudriaan & Gupta 1981 : 95)。Goudriaan は南インドのヴィシュヌ派のヒンドゥー寺院で行われているバリも報告している。それによれば、バリの供物は水、花、香水、線香、灯明、そして食物 (バリ)、あるいは水、花、食物があげられ、これらの供物が寺院内のすべての神々に供えられる。供物の残りは鬼神へと投じられる。⁶³⁾ヴァイシュヴァデーヴァの「家」やVA のバリ儀礼の「マンダラ」と同じ位置を、ここでは「寺院」が占めている。

バリ儀礼という同じ名称でよばれるこれらの儀礼をながめてみると、アバヤーカラグプタがいうような「妨害者を慰撫する」という定義だけでは、バリ儀礼は説明できないことがわかる。バリ儀礼は基本的には施食供養であるが、その対象はつねに家やマンダラ、寺院などを基準にして、その中心から周縁へ、さらに外側へと広がっている。儀礼の対象の広がりが、空間の広がりに結びついているのである。

VAのバリ儀礼では儀礼行為者はバリを終えた後、十忿怒尊と護世神を「マンダラの家屋」の外へと移動させる。また、定期的なバリの場合、これらの尊格へのバリは、はじめから「マンダラの家屋」の外で行われた。そのときはこれらの神々は土団子で表される。このようにVAのバリ儀礼でもバリは「マンダラの家屋」を意識して実践された。また十忿怒尊や護世神の位置がマンダラの家屋の中であったり、外であったりするの、彼らが家という空間の、中の領域にも外の領域にもふくまれる、境界上の存在であることを示しているのであろう。

「マンダラの家屋」はここではマンダラを制作し、儀礼を行う実際の建造物を指していると考えられるが、VAではマンダラにふくまれる建物すなわち楼閣そのものを「マンダラの家屋」が指している場合がある。VAにおいて「マンダラの家屋」という語は14回あらわれる⁶⁴⁾。そのほとんどはマンダラの儀礼を行う建造物を指しているが、「妨害者の撃退の儀軌」(Vighnanivāraṇavidhi)には「十輻輪(守護輪)の中心に楼閣の形をしたマンダラの家屋をすみやかに観想せよ」という用例が登場する⁶⁵⁾。ここではあきらかにマンダラの楼閣を「マンダラの家屋」とよんでいる。内側でマンダラを実際に作る建造物も、十輻輪にのった観想上の楼閣もいずれも「マンダラの家屋」とよばれるのは、両者が本質的には同じもので、儀礼的な文脈においては同じ機能をはたしているためではないだろうか。エリアーデ的な見方をすれば、家も寺院もマンダラもいずれも中心をもち、コスモスをかたどった聖なる空間である(森 1994: 105-106)。バリ儀礼はそこにふくまれる神々、あるいはその外側をとりまく神々や生類に対する施食である。その場合、供物はいずれの神々であっても共通であるが、バリを与える順序とそれを行う位置は厳密に定められている。バリ儀礼において儀礼の対象の広がり、家やマンダラを介して実際の空間的な広がり結びついていたことは、儀礼の対象がコスモスに占める位置、すなわち彼らのヒエラルキーを確認する作業を、バリ儀礼をとおして行っているとみなすことができる。

4. おわりに

VAの中のごく一部の章をさいて解説されるバリ儀礼は、VAの中の儀礼体系の中では文字どおり、その周縁を占めるにすぎない小さな儀礼である。しかし、これまでに見てきたように起源や特徴などに関するさまざまな問題がふくまれている。また、インド仏教の歴史を通じて連綿と実践されつづけた数少ない儀礼でもある。

バリ儀礼を特徴づけるものは、儀礼のユニットとして儀礼の始まりと終わりに行われること、プージャーやアルガなどの他の献供の儀礼とはことなり、食物を中心に供物が構成され、酒、生肉など、不浄とも考えられる供物も用いられたこと、儀礼の対象の広

がりが空間と結びついて、儀礼行為者は決められた順序で彼らに供物を与えたことなどがある。とくに最後の点は、仏教にかぎらず、ヴェーダの祭式やヒンドゥー教の儀礼においても共通してみられ、バリ儀礼を行うもっとも根元的な理由と結びついていると考えられる。

ここではくわしく検討しなかったが、「バリ儀軌」の中にあらわれたマントラにも注目すべきであろう。マンダラの中尊や他の尊格へのマントラは単なる呼びかけの言葉が多く、バリとしての性格を読みとることはむずかしいが、十忿怒尊やヒンドゥー神へのマントラの多くは、「食べよ」「摂取せよ」などの動詞の命令形をたたみかけたような文章で構成され、もともとバリ儀礼のそなえていたプリミティブな性格を保持している。マントラを中心に他の密教文献にあらわれたバリ儀礼との比較をとおして、インド密教のバリ儀礼のアウトラインをたどることができるのではないだろうか。

また、ここではVAで説かれるバリ儀礼を一括してあつかい、アバヤーカラグプタが示すバリの種類にはあまり注意を払わなかった。しかし、彼の記述によれば、バリには儀礼の始まりと終わりに行うものと、毎日定刻に行うものがある。またナーガに対するバリは「ナーガ・バリ」とよばれ、単独で行われている。ナーガ・バリの供物は一般のバリとはことなり、ナーガが好むとされる牛乳を中心にしたものであった。バリ儀礼の起源や性格を考察するためには、少なくともこれら三種類のバリ儀礼はそれぞれ別のものとしてあつかう必要があったかもしれない。儀礼のユニットとしてのバリと、毎日定刻に行うバリとの間のもっとも大きなちがいは、毎日行うバリにおいてはバリの対象を土団子であらわし、これに食物を与える点である。土団子や米の団子を用いた儀礼は「サンディヤー・ウパーサナ」(sandhyā-upāsana)や「タルパナ」(tarpaṇa)など、ヒンドゥー教ではさまざまなものがあるが、バリ儀礼との結びつきは一般的ではない。一方のナーガ・バリについても、その名称は「グリヒヤ・ストラ」にすでにあらわれるが、そこではヘビを殺した罪を消し、殺したヘビを慰撫する儀礼として説明されている。VAのナーガ・バリに対応するのは「サルパ・バリ」(sarpabali)とよばれる儀礼である⁶⁶⁾。両者の内容の転換がいつ、どこで起こったのかは明らかではない。

初期の密教經典の「施食供養」とVAに説かれるバリ儀礼とを比較してみると、前者が後者の原型であるとはいいがたいほどの格差がふたつの間には感じられる。しかもVAの場合、バリ儀礼は大きな儀式のユニットにすぎず、さらにバリ儀礼を前後に行うこのような儀礼も、アビシェーカやプラティシュターなどの儀式の一部に組み込まれている。インド密教の歴史は、このような儀礼の体系を仏教徒たちが模索していった歴史であるが、そのモデルを他の宗教に求めることによって、自らのアイデンティティーを失っていった歴史でもある。

註

- 1) 「16階梯からなるプージャー」については、Tachikawa (1983), Bühnemann (1988 : 135-178), Babb (1975 : 31-67) 参照。
- 2) 前註にあげた他にも、たとえば Fuller (1992), Diel (1956), Goudriaan (1970) など。プージャーに関する人類学的立場からの議論は、田中 (1986) にまとめられている。
- 3) 例外的に、パーリ仏典のバリ儀礼については、奈良 (1975)、片山 (1974, 1975) のまとまった研究がある。これらをふくめバリ儀礼に関する従来の研究には、第三節でふれる。
- 4) VA はサンスクリット写本が現存するが、校訂テキストは刊行されていない。ここでは、現存する写本から筆者が校訂したエディション (未刊) を用いた。またチベット訳テキストとして、北京、デルゲ、ナルタンの三版を参照した。これらについては森 (1991b) を参照。VA の該当箇所は、便宜上、北京版のチベット訳テキストの頁、葉、行で指示した。なお、一部の註では行番号を省略し、頁と葉のみを示した。
- 5) VA の50儀軌の名称は森 (1991b : 54-55) にあげられている。VA の主要な三つのトピックとそれ以外の小儀軌の関係、および VA の全体の構成については森 (1995) 参照。
- 6) 西岡 (1983 : 113-114)
- 7) 『アームナーヤ・マンジャリー』の該当箇所は TTP, no. 2325, vol. 55, 238.3.6-242.1.3。
- 8) TTP, vol. 80, 125.2.8-3.1.
- 9) VA の第8儀軌「妨害者にキーラを打つ儀軌」(Vighnakilanavidhi) の中で、インドラをはじめとする護世神が十忿怒尊によって除去される (森 1992b : 95-96)。
- 10) Skt. trimuṇḍa; Tib. mgo bo gsum. 文字どおりには「三つの頭をもつもの」であるが、具体的に何を指しているかは不明。ここでは「三脚」と訳す。
- 11) Skt. hri.
- 12) 「海にある甘露」(sāgarāmṛta) が何を指しているのか、筆者には明らかではない。海と甘露との結びつきは、ヒンドゥー教の有名な創世神話で、神々が不死の妙薬、甘露 (amṛta) を手にいれた「乳海攪拌」を連想させる (上村 1981 : 62-66)。神々が大海を攪拌しているときに大火が生じ、インドラが雨を降らせて火を消したことも、この観想法のイメージと重なっているのかもしれない。
- 13) タントリズムにおける水銀の象徴性と、水銀と不死との結びつきについては、エリアーデ (1975 : 123-133) 参照。
- 14) 該当箇所は Poussin (1896 : 2-3)、和訳は酒井 (1956 : 52-53)、チベット訳は TTP, vol. 65, 19.3.3ff。
- 15) サンスクリット・テキストは Bhattacharyya, B. (1972)。Bhattacharyya, D. C. (1981 : 72-73) は VA のマンダラの数を NPY のそれよりも多く数えているが、これは誤りで

ある。

- 16) 森 (1994 : 130) 参照。さらに VA のこの部分のチベット訳テキストでは、師が姿をとる尊格の名称を「金剛持」ではなく「金剛薩埵」(rdo rje sems dpa') としているが、金剛薩埵もこれらの尊格と同一視されている。
- 17) TTP, vol. 80, 107.5. 他にも 88.5 と 111.1-2 においても言及されるが、いずれもバリ儀軌と同様、第一句のみをあげるにとどまる。
- 18) サンスクリット・テキストは Matsunaga (1978 : 96) の第一偈から第五偈に相当する。サンスクリットおよびチベット訳テキストと翻訳は Fremantle (1971 : 122, 372-373) にも含まれる。
- 19) 十忿怒尊については森 (1991c) 参照。
- 20) パードヤ、アーチャマナ、アルガについては森 (1991a) 参照。
- 21) Skt. trimāṇḍalaparīśuddhi. 布施を行うときに、与える者と受ける者、そして施物そのものがいずれも空であると観じること。
- 22) TTP, vol. 80, 89.1-2.
- 23) sarvaduṣṭasamayamudrāprabhañjaka mama śāntiṃ rakṣāṃ ca kuru svāhā hūṃ/ oṃ āḥ sarvatryadhvajadaśadiglokadhātvanantagaganasamudrameghavyūhaprasaraparamāṇurajo-maṇḍalaparamparāntargatasamāpattyavasthitā dharmadhātusamavaśaraṇā ākāśadhātuparyavasānāḥ sarvatryadhvajadaśadiglokadhātvanantameghavyūhaprasaragaganasamāḥ sarvalokapālāḥ sarvasattvāḥ.
- 24) vajrāyudha-māyāvajra-vajrānala-vajrakāla-vajramuṣala-nāgavajra-vajrānīla-vajrabhairava-vajraśauṇḍa-vajrakrodha-vajrakuṇḍali-vajraprabha-maunavajra-vemacitri-prṭhvidevatāḥ saparivārā imaṃ puṣpadhūpadipagandhanivedyādisaṃyutaṃ balyupahāraṃ praticchopabhuñja mama hiraṇyasuvarṇadhanadhānyāyuryauvanārogyasatsukhopahārakān sarvaviḡhnavināyakān sarvaduṣṭapraduṣṭān manuṣyāmanuṣyān jambhayata stambhayata bandhayata vidhvamsayata mama hiraṇyasuvarṇadhanadhānyāyuryauvanārogyasatsukhāni mahāsukhapravṛddhaye yāvad ābodhimāṇḍaparyantaṃ dhaukayata satsahāyatāṃ śāntiṃ rakṣāṃ ca kuruta hūṃ.
- 25) oṃ ananta vāsuki takṣaka karkoṭa padma mahāpadma śaṅkhaṇḍa kulika pāla devati mahādevati somaśikhi mahāsikhi daṇḍadhara mahādaṇḍadhara apalālahuṇḍa nandopananda sāgara mahāsāgara tapta mahātapta śrikānti mahākānti ratnakānti svarūpa mahāsvarūpa bhadrahika mahodara śīli mahāśīli oṃ bhakṣa āgaccha āgaccha mahānāgādhipati sarva bhūr bhuvāḥ phuṃ phuṃ svāhā.
- 26) oṃ yogaśuddhāḥ sarvadharmā yogaśuddho 'ham.

日本密教で「浄三業の陀羅尼」として知られているマントラの「自性」(svabhāva)

- の語を「ヨーガ」(yoga) に置き換えて作られている。
- 27) Skt. は kamalāvartta と ālīnganamudrā. 具体的な形態は不明。
- 28) TTP, vol. 80, 111.2.
- 29) VA ではこの他に「土地に穴を掘る儀軌」(Bhūkhananavidhi) で「マンダラの儀礼行為」という語が登場する (TTP, vol. 80, 83.5)。
- 30) om krto vaḥ sarvasattvārthaḥ siddhir dattā yathānugā//
gacchadhvam buddhaviṣayaṃ punar āgamanāya muḥ//
om aḥ hūm akāro mukhaṃ sarvadharmānām ādyanutpānatvāt hūm muḥ.
- 31) 「マンダラの成就の儀軌」ではカールティケーヤ (Kārtikeya)。
- 32) 「マンダラの成就の儀軌」ではガナパティ (Gaṇapati)。
- 33) 「マンダラの成就の儀軌」では父祖 (Pitr)。
- 34) Skt. aṣṭapadamantra. 具体的な内容は不明。
- 35) Skt. jvālāmudrā. 具体的な形態は不明。
- 36) om kakka kaṭṭana bandha bandhana khakkhā khādāna sarvaduṣṭānām hana hana
gha gha ghātaya amukasya śāntiṃ kuru hūm hūm phaṭ phaṭ jaḥ svāhā
- 37) サンヴァラマンダラについては森 (1993 : 207-212) 参照。
- 38) 十忿怒尊はサンヴァラマンダラには含まれず、NPY やVA のサンヴァラマンダラの項でも十忿怒尊の名称や特徴は説かれていない。そのため、アバヤーカラグプタはここで招来される十忿怒尊が『アビダーナ・ウッタラタントラ』(Abhidhānottaratantra) を典拠とすることを明らかにしている。該当箇所は Lokesh Chandra (1981 : 24.4-24.6)。また、十忿怒尊の尊容は NPY の「サンヴァラマンダラ」(第12章) を参照するよう指示しているが、実際にはそこではなく、直前の「ヴァジュラフォームカーラ・マンダラ」(第11章) に該当する記述が含まれる (Bhattacharyya 1972 : 24-25)。アバヤーカラグプタの思い違いであろう。また、一部の尊名は一致しない。なお、中尊の観想次第はアバヤーカラグプタの自著『チャクラサンヴァラの現観』(Cakrasamvarābhisamaya) を参照せよと述べる。該当箇所は TTP, no. 2213, vol. 52, 31.1.2-2.5。
- 39) om vajradāka imam balim ḡṛhna ḡṛhna hūm phaṭ om jaḥ hūm vaṃ hoḥ samayaṣ tvam
drśya hoḥ.
- 40) om kara kara kuru kuru bandha bandha trāsaya trāsaya kṣobhaya kṣobhaya hraum
hraum hraḥ hraḥ hoṃ hoṃ baṭa baṭa daha daha paca paca bhakṣa bhakṣa
vasarudhirāntramālāvalambine ḡṛhna ḡṛhna saptapātālagatabhujāṅgasarpam vā tajraya
tajraya ākaṭṭa ākaṭṭa hrīm hrīm jom jom ksmām ksmām hām hām hīm hīm hūm hūm
kili kili sili sili hili hili dhili dhili hūm hūm phaṭ phaṭ svāhā.
- 41) om khavajradhṛk vajrahūmkāra vajra hūm phaṭ/ om vajradāda vajra hūm phaṭ/ om

vajrānalārka vajra hūṃ phaṭ/ om vajrakuṇḍali vajra hūṃ phaṭ/ om vajrayakṣa vajra hūṃ phaṭ/ om vajrakāla vajra hūṃ phaṭ/ om vajramahābala vajra hūṃ phaṭ/ om vajrabhīṣaṇa vajra hūṃ phaṭ/ om vajroṣṇīṣacakravartī vajra hūṃ phaṭ/ om vajrapātāla vajra hūṃ phaṭ.

42) om kha kha khāhi khāhi sarvayakṣarākṣasabhūtapretapiśāconmādāpasmārādākākinī-
ādāya imaṃ baliṃ gr̥hṇantu samayaṃ rakṣantu sarvasiddhiṃ me prayacchantu hūṃ
hūṃ phaṭ phaṭ svāhā.

43) Bhattacharyya (1968 : 441, 495, 532)、服部 (1991 : 12)。

44) サンスクリット原文は以下のとおりである。

om vajraheruka samayaṃ ānupālaya herukatvenopatiṣṭha dr̥dho me bhava sutoṣyo me
bhava anurakto me bhava supoṣyo me bhava sarvasiddhiṃ me prayaccha sarvakarmaṣu
ca me cittam śreyahkuru hūṃ ha ha ha ha hoḥ bhagavan vajraheruka mā me muñca
heruko bhava mahāsamayasattva āḥ hūṃ phaṭ

45) ヘーヴァジュラマンダラもサンヴァラマンダラと同様、十忿怒尊はマンダラに含ま
れない。アバヤーカラグプタは十忿怒尊の典拠を『ダーキニー・ヴァジュラパンジャ
ラ・タントラ』 *Dākinīvajrapañjaratantra* (TTP, no. 11) に求めている。該当箇所は、
TTP, vol. 1, 223. 4. 7-8。

46) om devapicuvajra imaṃ baliṃ gr̥hṇa gr̥hṇa amukasya śāntim rakṣāṃ ca kuru hūṃ
hūṃ hūṃ phaṭ svāhā.

47) namaḥ samantabuddhebhyo namo vajramudgarahastāya caṇḍamaṇḍalākṣepakarāya
hūṃ phaṭ/

namaḥ samantabuddhebhyo mahādaṇḍadhara vividhasurāsuramardanabhūtān nirmathā
hūṃ phaṭ/

namaḥ samantabuddhebhyo hulu hulu mahāpadma amṛtikuru mahāpadma amṛtikuru
mahāviṣān āḥ/

namaḥ samantabuddhebhyo namaḥ vajrakrodhāya mahādamṣṭrotkaṭabhairavāya
vajrasaṃdoha darpāya amṛtakuṇḍali hūṃ/

namaḥ samantabuddhebhyo namo 'cala kāṇa cehu mohu mohu tuhu tuhu gha gha
ghātaya ghātaya hūṃ phaṭ/

namaḥ samantabuddhebhyo ṭakki hūṃ jah/

namaḥ samantabuddhebhyaḥ om yamaḍḍāya nilāya niladaṇḍāya turu turu muru
muru sarvaduṣṭān mārāya hūṃ phaṭ/

namaḥ samantabuddhebhyo namo mahābalāya ucchuṣmakrodharājāya sarvanāgānāṃ
hr̥dayaṃ tāḍaya hūṃ phaṭ/

namah samantabuddhānām namah samantadharmānām namah samantasāṅghānām/ om
 sitātapatra om vimala om śankara om pratyaṅgiravajra uṣṇīṣacakravarti sarvayantra-
 mantramūlakarma bandhana tādana kilanaṃ vāmamakṛte yena kenacit kṛtaṃ tat sar-
 vam ucchinda ucchinda bhīṇḍa bhīṇḍa ciri ciri miri miri mara hūṃ hūṃ hūṃ hūṃ hūṃ
 hūṃ hūṃ hūṃ hūṃ hūṃ phaṭ phaṭ phaṭ/
 om sumbha nisumbha hūṃ gr̥hna gr̥hna hūṃ/ gr̥hnāpaya gr̥hnāpaya hūṃ/ ānaya ho
 bhagavan vidyārāja hūṃ phaṭ.

- 48) om indra jama jalaja ktyabhuda bahnivāḍarakkhacandasujjamādavappatalayatālem
 aṣṭadusappa edam balim buñjājimghaphulla buppamāra baṃha amhakajjasaccamāba-
 khanti khaṇipheḍagāda svāhā/om akāro mukhaṃ sarvadharmānām ādyanutpannatvāt
 om āḥ hūṃ phaṭ svāhā
- 49) TTP, vol. 80, 81.3, 81.4, 82.1, 82.3, 82.4 (2回), 84.1, 84.2, 84.3, 87.2,
 88.5, 98.3 (2回), 408.1, 109.3, 109.4, 111.2, 112.3, 112.1, 112.3 (2回), 112.4,
 114.1, 120.1, 122.5, 123.2. この他にも2回バリは言及されるが⁵(81.2, 125.3)、
 いずれもバリ儀礼を実行せよという指示ではない。
- 50) 4種の儀礼には「僧院などへのアルガ」「尊像などのプラティシュター」「池などの
 プラティシュター」「苑林などのプラティシュター」がある。
- 51) TTP, vol. 80, 81.4 (2回), 81.5 (2回), 82.1, 82.4 (2回), 82.5, 84.1, 84.2,
 86.4, 87.1, 87.3, 87.5, 88.5, 89.3, 89.5, 90.2, 96.2, 98.3, 98.4, 107.5, 108.3,
 109.2, 109.5, 111.1, 111.3, 111.4, 111.5, 112.1 (2回), 112.2, 112.3, 112.4 (2
 回), 116.3, 120.1, 122.5 (2回), 123.1, 123.2 (2回), 123.4, 124.1, 124.3,
 126.1.
- 52) VA では物質に対する供養をさす場合、abhy√arc を用い、√pūj は用いられない。
 abhy√arc の用例は、TTP, vol. 80, 90.2, 98.4にある。
- 53) TTP, vol. 80, 81.3, 81.5, 82.1, 82.2, 82.4, 84.2, 87.3, 88.5, 90.2, 107.5, 108.5,
 109.1, 109.2, 109.4, 112.1, 112.4, 122.5, 123.5, 124.1, 124.3, 124.5, 126.1.
- 54) プージャーが体系化された「16階梯からなるプージャー」などの組織化された儀式
 では、アルガの献供やバリ儀礼は、儀式としてのプージャーのユニットになる。
- 55) TTP, no. 6210, vol. 161, 138.5.1-139.2.5.
- 56) 大正蔵 第895番 第18巻、p. 731ab. VA のあげるヒンドウの15神には一致しな
 いが「十五の鬼神」に対して施食を行えと述べる経典もある（『童子経念誦法』大正
 蔵 第1028番 第19巻、p. 743ab）。
- 57) 「グリヒヤ・スートラ」のバリについては Gonda(1980: 234, 418-420)、Kane(1974:
 745-748) にくわしい。「グリヒヤ・スートラ」の個々の内容については永ノ尾 (1992)

にまとめられている。Gonda (1977 : 582-615) も参照。

- 58) 渡瀬 (1190 : 99-105)、Kane (1974 : 749-756) 参照。「グリヒヤ・スートラ」の諸文献にふくまれる五大祭については、高橋 (1991, 1992, 1993) が詳しい。五大祭の具体的な方法は Vidyārṇava (1974 : 157-165) にまとめられている。
- 59) 両者の関係は高橋 (1991 : 80)、永ノ尾 (1992 : 70-71) 参照。
- 60) 高橋 (1991) による。
- 61) 『バウダーヤナ・グリヒヤ・スートラ』 *Baudhāyanagṛhyasūtra* (2.8.25) は、ヴァイシュヴァデーヴァの対象を、「家の神々」「家の敷地の神々」「家の敷地の主」という、家を基準とした三種に分類している (Smith 1989 : 148)。
- 62) ヒンドゥー・タントリズムにおける動物供犠としてのバリ儀礼は Gupta (1979 : 153)、Fuller (1992 : 14783-86) 参照。
- 63) Goudriaan (1970 : 206-207)。寺院の本尊であるヴィシュヌへのバリはこれとは別の段階で実施される。この他にも Gonda (1976 : 79-80) 参照。
- 64) TTP, vol. 80, 87.1, 108.2, 108.4, 109.4, 114.1 (2回), 114.1 (2回), 122.5, 123.2 (2回), 124.1, 124.2, 125.3。
- 65) 前註の最後の用例。
- 66) ナーガ・バリとサルパ・バリについては Gonda (1980 : 419)、Kane (1974 : 821-823) 参照。サルパ・バリについてのまとまった研究は Winternitz (1888) がある。また、ネパールで行われているサルパ・バリについては Hoek & Shrestha (1992) の研究がある。

略号表

NPY : *Niṣpannayogāvalī*

VA : *Vajrāvalī*

TTP : Tibetan Tripiṭaka, the Peking edition (『影印北京版西蔵大蔵経』鈴木学術財団)。

大正蔵 : 大正新脩大蔵経

参考文献

- 永ノ尾信悟 1992 「グリヒヤスートラ文献にみられる儀礼変容」『東洋文化研究所紀要』118 : 43-86。
- 永ノ尾信悟 1993 「ヒンドゥー儀礼の変容——朝の勤行を例として」『インド=複合文化の構造』(長野泰彦・井狩弥介編) 法蔵館、pp. 261-318。
- エリアーデ、ミルチャ 1975 『ヨーガ』 立川武蔵訳 せりか書房。
- 片山一良 1974 「バリ (Bali) 儀礼——歴史とその意味 (上)」『宗教学論集』7 : 79-91。

- 片山一良 1975 「バリ (Bali) 儀礼——歴史とその意味 (下)」『宗教学論集』8 : 103-122。
- 上村勝彦 1981 『インド神話』 東京書籍。
- 酒井真典 1956 『チベット密教教理の研究』 高野山出版社。
- 高橋 明 1991 「Pañcayājñā(1)—グリヒヤ祭式研究Ⅷ」『印度学仏教学研究』 39(2) : 79-82。
- 高橋 明 1992 「Pañcayājñā(2)—グリヒヤ祭式研究Ⅸ」『印度学仏教学研究』 40(2) : 84-87。
- 高橋 明 1993 「Pañcayājñā(3)—グリヒヤ祭式研究Ⅹ」『印度学仏教学研究』 41(2) : 50-54。
- 田中雅一 1986 「礼拝・アビシェーカ・供犠——浄・不浄から力へ；スリランカのヒンドゥ寺院儀礼」『民族学研究』 51(1) : 1-31。
- 奈良康明 1975 「古代インド仏教における「仏法」と「世法」の関係について——ジャータカにおける祈願儀礼 (bali-kamma) の構造と機能」『仏教における法の研究』 春秋社、pp. 97-134。
- 西岡祖秀 1983 「『プトン仏教史』 目録部索引Ⅲ」『東京大学文学部文化交流施設研究紀要』 6 : 47-201。
- 服部しのぶ 1991 「ネパールの仏教儀礼「ガダーン・ムガ」」『東海仏教』 36 : 1-16。
- 堀内寛仁 1983 『初会金剛頂経の研究 (上)』 高野山大学密教文化研究所。
- 森 雅秀 1991a 「インド密教儀礼における水」『国立民族学博物館研究紀要』 14(4) : 1013-1047。
- 森 雅秀 1991b 「インド密教における建築儀礼——*Vajrāvalī-nāma-maṇḍalopāyikā* 和訳(1)」『名古屋大学文学部研究論集』 111 : 53-73。
- 森 雅秀 1991c 「十忿怒尊のイメージをめぐる考察」『仏教の受容と変容 3 チベット・ネパール編』(立川武蔵編) 佼成出版社、pp. 293-324。
- 森 雅秀 1992a 「『ヴァジュラーヴァリー』と『マンダラ儀軌四百五十頌』」『印度学仏教学研究』 40(2) : 188-191。
- 森 雅秀 1992b 「インド密教における結界法——*Vajrāvalī-nāma-maṇḍalopāyikā* 和訳(2)」『名古屋大学文学部研究論集』 114 : 89-109。
- 森 雅秀 1993 「サンヴァラマンダラの図像学的考察」『曼荼羅と輪廻』(立川武蔵編) 佼成出版社、pp. 206-234。
- 森 雅秀 1994 「『完成せるヨーガの環』 第1章「文殊金剛マンダラ」訳およびテキスト」『高野山大学密教文化研究所紀要』 7 : 113-142。
- 森 雅秀 1994 「密教儀礼と聖なる空間」『日本仏教学会年報』 59 : 105-121。
- 森 雅秀 1995 「インド後期密教の儀礼文献の構成」『南東アジアにおける「正当」の波及・形成と変容』(石井 溥編) アジアアフリカ言語文化研究所 (印刷中)。
- 渡瀬信之 1990 『マヌ法典』(中公新書) 中央公論社。

- Babb, L. A. 1975 *The Divine Hierarchy : Popular Hinduism in Central India*. New York : Columbia University Press.
- Beyer, S. 1978(1973) *The Cult of Tārā*. Berkeley : University of California Press.
- Bhattacharyya, B. 1968(1925) *Sādhnamālā*, 2 vols.. Gaekward's Oriental Series, Nos. 26, 41. Baroda : Oriental Institute.
- Bhattacharyya, B. 1972(1949) *Niṣpanmayogāvali of Mahāpāṇḍita Abhayākaragupta*. Gaekward's Oriental Series, No.109. Baroda : Oriental Institute.
- Bhattacharyya, D. C. 1981 The Vajrāvali-nāma-maṇḍalopāyikā of Abhayākaragupta. In *Tantric and Taoist Studies in Honour of R. A. Stein* vol. 1(*Mélanges Chinois et Bouddhique* vol. 20), Bruxelles : Institute Belge des Hautes Étude Chinoises, pp. 70-95.
- Bühnemann, G. 1988 *Pūjā : A Study in Smārta Ritual*. Vienna : Institut für Indologie der Universität Wien.
- Diehl, C. G. 1956 *Instrument and Purpose : Studies on Rites and Rituals in South India*. Lund : Gleerup.
- Fremantle, F. 1971 *A Critical Study of the Guhyasamāja Tantra*. PhD dissertation submitted to London University.
- Fuller, C. J. 1992 *The Camphor Flame : Popular Hinduism and Society in India*. Princeton : Princeton University Press.
- Gellner, D. N. 1992 *Monk, Householder and Tantric Priest : Newar Buddhism and its Hierarchy of Ritual*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Gonda, J. 1976(1970) *Viṣṇuism and Śivaism : A Comparison*. New Delhi : Munshiram Manoharlal.
- Gonda, J. 1977 *The Ritual Sūtras*. A History of Indian Literature, Vol. 1, Fasc. 2. Wiesbaden : Otto Harrassowitz.
- Gonda, J. 1980 *Vedic Ritual : The Non-Solemn Rites*. Leiden : E. J. Brill.
- Goudriaan, T. 1970 Vaikhānasa Daily Worship according to the Handbooks of Atri, Bhṛgu, Kāśyapa, and Marīci. *Indo Iranian Journal* 12(3) : 161-215.
- Goudriaan, T. & S. Gupta 1981 *Hindu Tantric and Śākta Literature*. A History of Indian Literature, Vol. 2, Fasc. 2. Wiesbaden : Otto Harrassowitz.
- Gupta, S., D. J. Hoens & T. Goudriaan 1979 *Hindu Tantrism*. Leiden : E. J. Brill.
- Hoek, B. van den & B. Shrestha 1992 The Sacrifice of Serpents : Exchange and Non-Exchange in the Sarpabali of Indrāyaṇī, Kathmandu. *Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient* 79(1) : 57-75.
- Kane, P. V. 1974 *History of Dharmaśāstra*, vol. 2 (2 parts). Poona : Bhandarkar Oriental

Research Institute (2nd edition).

Kooij, K. R. van 1972 *Worship of the Goddess According to the Kālikā purāna*. Leiden : E. J. Brill.

Lokesh Chandra (reproduced) 1981 *Abhidhānottara-tantra*. Śata-piṭaka Series, Indo-Asian Literatures Vol. 263, New Delhi : International Academy of Indian Culture.

Matsunaga Yūkei 1978 *The Guhyasamāja Tantra, : A New Critical Edition*. Osaka : Toho Shuppan.

Poussin, de la Vallée 1896 *Pañcakrama*. Gand : Universite de Gand.

Smith, B. K. 1989 *Reflections on Resemblance, Ritual and Religion*. New York : Oxford University Press.

Staal, F. 1979 The Meaninglessness of Ritual. *Numen* 26 : 2-22.

Tachikawa, M. 1983 A Hindu Worship Service in Sixteen Steps, *Shodaśa-upacārapūjā*. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* (Osaka) 8(1) : 104-186.

Vidyārṇava, R. B. S. C. 1974(1918) *The Daily Practice of the Hindus Containing the Morning and Midday Duties*. The Sacred Books of the Hindus, vol. 20. New York : AMA Press.

Winternitz, M. 1888 Der Sarpabali, ein altindisches Schlangencult. *Mitteilungen der Anthropologischen Gesellschaft in Wien*. 18 : 25-52, 250-264.

<キーワード>

バリ儀礼、Vajrāvali, Abhayākaragupta